

# 冒険キャンプ体験がサッカーユニアユース選手の独自性欲求に与える影響

山本 一翔 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)  
指導教員 黒澤 毅

キーワード：冒険キャンプ，サッカー，独自性欲求

## 1. 序論

ジュニアサッカー界の問題の1つとして、優れた個性や特徴を持った子どもが少なくなったことが挙げられており、各クラブチームが個の育成を掲げ活動が進められている。一方で、人間存在の本質と結びついていると言われる独自性欲求の向上は、『自己を積極的に表に出す』、『他人の存在を気にする』ということに繋がり、自己の存在をアピールしたいという『自己顕示型の独自性欲求』を育む事になる<sup>3)</sup>。

困難を乗り越え「自己の能力への気付き」、「他者への信頼の気付き」を得られる冒険キャンプ<sup>1)</sup>は、「自己を積極的に出せるか否か」、「他者の存在を気にするか否か」の2因子から構成される独自性欲求に影響を与え、そのことがサッカー場面における「個」の変化に繋がると筆者は考えた。

そこで本研究は、冒険キャンプ体験によるサッカーユニアユース選手の独自性欲求の変化を明らかにし、サッカー場面での「個」の変化について明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

【対象者】平成25年8月11日～14日に行われた、仲間作り野外ゲームや登山を中心とした冒険キャンプに参加したS県0市の総合型地域スポーツクラブのサッカーユニアユースチームの選手26名を対象とした。そのうち3名のアンケートに不備があったため、23名を調査対象とした。

【調査用紙】(A)あなたに関するアンケート：キャンプ場面における選手の独自性欲求を測定するため、宮下<sup>2)</sup>が作成した「ユニークさ尺度」を使用した。(B)サッカー場面に関するアンケート：サッカー場面における選手の独自性欲求の測定のため、コーチ2名に、宮下<sup>2)</sup>が作成した「ユニークさ尺度」をもとに筆者が独自に変更を加えたものを使用した。(C)ふりかえりシート：キャンプ場面における選手の独自性欲求の変化をより詳しく知るため、筆者が独自に作成したものをキャンプとカウンセラーに、毎日の活動終了後に使用した。調査時期を表1に示した。

表1 調査時期

	Pre1	Pre2	Game1	Game2	Game3	Game4	Post1	Post2
ユニークさ尺度	○	○					○	○
ふりかえり			○	○	○	○		○
サッカー場面に関するアンケート	○							○

## 3. 結果と考察

1) 独自性欲求は、実験群と統制群間に、有意な差はみられなかったが、キャンプ直前(Pre2)からキャンプ直後(Post1)にかけて得点は向上した(表2)。

表2 独自性欲求総得点の平均と標準偏差

	Pre1			Pre2			Post1			Post2		
	N	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
実験群	23	63.26	8.25	62	7.98	64.83	7.53	64.61	6.91	64.61	6.91	
統制群	38	62.66	7.72					64.16	7.25			

仲間と協力して困難な課題を解決したことで自分以外の班の仲間に気遣うことや、相手を尊重すること、自分の意見に自信を持ち発言することをキャンプ中にみられたことが影響したと考える。また、サッカー場面における独自性欲求得点は、有意な差はみられなかったものの、「自己を積極的に

表に出せるか否か」因子の得点は向上した(表2)。

一人では解決できないような課題を、班の仲間との協力によって解決していく場面で、自分の意見を班の仲間に伝えたことにより課題を解決できたという成功体験が、自分の意見に自信を持たせたと考える。

2) キャンプ前後における独自性欲求タイプの変化について検討したところ、自己中心型6名のうち5名とわが道型2名の両名が自己顕示型へと変化した。コーチから見たサッカー場面では、抑圧型10名のうちの2名が自己顕示型へと変化した。Pre段階においてキャンプ場面、サッカー場面共に「自己顕示型」が12名、残りの3タイプの合計が11名いた。Post段階においてキャンプ場面は「自己顕示型」が16名、残りの3タイプの合計が7名と変化した。しかし、サッカー場面は「自己顕示型」が13名、残りの3タイプの合計が10名と、あまり変化しなかった(表3, 4)。

表3 キャンプ場面における独自性欲求タイプの変化

	わが道型		抑圧型		自己中心型		自己顕示型	
	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
1班	0	0	1	2	2	0	3	4
2班	0	0	2	3	1	1	3	2
3班	2	0	0	0	1	0	2	5
4班	0	0	0	0	2	1	4	5
合計	2	0	3	5	6	2	12	16

表4 サッカー場面における独自性欲求タイプの変化

	わが道型		抑圧型		自己中心型		自己顕示型	
	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
1班	0	0	2	2	1	1	3	3
2班	0	1	4	3	0	0	2	2
3班	0	0	2	2	0	0	3	3
4班	0	0	2	0	0	1	4	5
合計	0	1	10	7	1	2	12	13

宮下<sup>2)</sup>は、独自性欲求表出の仕方としては未熟であると言える「抑圧型」や「自己中心型」から脱し、「わが道型」や「自己顕示型」に移行することが、独自性欲求表出の仕方としてはよりよいものであり、そのタイプの移行によって、自己の内面を十全に表現できるだけの健全な創造的活動が可能になると述べているため、キャンプを経験したことで選手の「個」に良い影響を与えたと考える。しかし、選手とコーチの間には認識の差がみられた。

選手とコーチの間の認識の差を少なくするため、コーチは選手とコミュニケーションをとる機会を増やし、選手の考えを理解することが大切である。また、選手もコーチの考えを理解することが大切である。これにより、選手とコーチの間の認識の差は少なくなり、コーチは選手の考えを理解した指導ができ、選手の成長へと繋がると考える。

## 4. まとめ

冒険キャンプに参加したサッカーユニアユース選手の独自性欲求は、有意な差はみられなかったが、得点は向上した。また、冒険キャンプは独自性欲求タイプとして「自己顕示型」を育んだが、選手自身の評価したタイプとコーチが選手を評価したタイプに相違がみられた。

## 引用・参考文献

- 1) 飯田稔, 井村仁, 影山義光(1988) : 冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容 筑波大学体育科学系紀要 11: pp. 79-86.
- 2) 宮下 博 (1991) : 大学生の独自性欲求の類型化に関する研究 教育心理学研究 39(2), pp. 214-218.
- 3) Snyder, C, R, & Fromkin, H, L, 1977 Abnormality as a positive characteristics: 86, 518-527